

知る・見る・考える
八幡市民の
交流紙

きずな

Vol.12

発行元：NPO法人22世紀
八幡ルネッサンス協会
八幡市八幡高畑 10-76
TEL・FAX 075-981-6505
発行：年4回

◆ 目次 ◆

八幡に活きる	… 1
弥生の至宝	… 2
やわたしぜんだより	… 4
八幡巡礼	… 6
宗教と社会	… 7
八幡の芸能	… 8
八幡 俳句歳時記	… 9
コロナ渦を考える	… 10
読者の文芸／編集後記	… 12

八幡に活きる

食堂経営六十余年

小谷 昌徳
清江



昭和18年、現住所に4人兄弟の長男として生まれました。昭和24年に今も残る八幡小学校に入學。当時の八幡町には八幡小学校1校しかなく、橋本の子等も男山を迂回して八幡小学校に通っていました。1学年30名程でした。戦後の6・3制、男女共学が始まってまもなくの頃で

す。学校に使われていた寺の門が、その後移転され、今、松花堂庭園の裏門になっています。

当時の子どもらの遊びと言えば、めんこやビー玉、竹馬です。学校にはプールがなく、夏になると、木津川や大谷川で水泳をしました。その頃は水もきれいでした。木津川には、枚方や伏見など近郷近在から川遊びをする人が大勢押し寄せ、浜茶屋も立ち、賑わいました。娯楽のない時代で、学校での映画会が楽しみでした。はつきり覚えていませんが、泰勝寺の向かいに芝居小屋があったようです。

楽しみは地元の太鼓祭りです。子供たちも「子ども太鼓」に楽しみました。今は、担ぎ手が少なくなったので土日を挟んで行われますが、長い間、7月16日から18日までの3日間行われました。

16日は「足慣らし」と言って、小屋から屋形が出され、組み立てられて周辺を少し練ります。17日には、「よっさーよっさー」のかけ声勇ましく町内を巡回し、18日には高良神社の宮入りが盛大に行われ、一区、二区、

三区、六区のそれぞれの屋形とその練りぶりが競われます。

高良まつりが地元の賑やかで盛大な祭であるのに対し、9月15日に行われる石清水祭はおごそかなイメージです。妹がお稚児さんに参列した際には、後見役で立ち合ったことがあります。この日、八幡の町では「鯖寿し」を作る家が多く、親戚筋に配ったりしました。

わが家は祖父の代から「うどん屋」が生業でした。メリケン粉を水でこね、伸ばし、手回し器で切断して玉にするのです。できたうどん玉は、店でも販売しましたが、注文に応じて橋本の遊郭等に届けることもありました。

父親が病弱であったために、中学生の頃から手伝わされました。手廻し器で成型する作業は結構力が要ります。

食堂は親の代から始まり、名物になった「カレー中華」は客の要望で生まれました。「カレーうどんがあるんやから、カレー中華もやってみたらどうなんや」

それが結構評判になって、テレビ局が取材にきたこともありま。他の献立も客の要望から生まれたものがあり、椎茸を煮しめた「木の葉どんぶり」も好評です。

店の脇に徳岡稲荷が鎮座していますが、これは周辺の11軒の家々が年毎に当番を決めて清掃をし、世話役を務めます。そして、2月の午の日に、伏見の御香宮神社の神主さんにお祓いをしてもらいます。

食堂の2階では、カラオケ喫茶を妻の清江が中心に営んでいますが、新型コロナのことで休業しました。今一番の願い事は、新型コロナが一日も早く収束することです。





式部谷銅鐸（2）

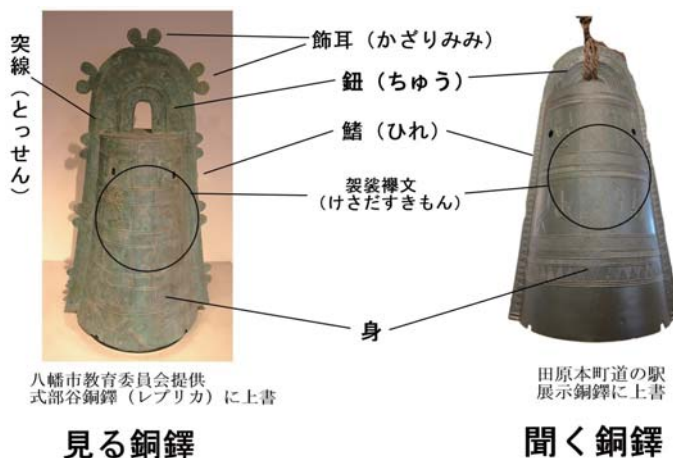
濱田博道

国道24号線を南下し、奈良市・天理市を過ぎると、その南は磯城郡田原本町（人口約3万2千人）です。田原本町には全国最大級（甲子園10個分）の弥生時代の唐古・鍵遺跡があります。整備され、2018年4月、史跡公園としてオープンしました。

公園を挟んで道路の反対側にある道の駅「レスティ唐子・鍵」の売場横に銅鐸（レプリカ）が展示されています（遺跡から銅鐸の鋳型が出土）。訪問した時、ちょうど親子連れの家族がいて、「これ銅鐸っていうのよ。鳴らしてごらん」というお母さんの勧めで子どもが振って鳴らし、親しんでいました。「銅鐸の写真を撮っていいですか」と案内のおじさんに聞くと「どうぞ、どうぞ。いっぱい撮ってまわってや」との返事で、撮ってきたのが下段右の銅鐸です。左は八幡の式部谷銅鐸です。

この2つの銅鐸を比べながら銅鐸の変遷を考えたいのですが、その前

に各部分の名称のいくつかを学習しましょう。



見る銅鐸

聞く銅鐸

◆銅鐸各部分の名称

銅鐸は釣鐘（つりがね）を扁平にした形をしています。吊り下げる上部の吊り手部分を鈕（ちゆう）といい、鈕の下側の部分を身（み）といいます。両横には鰭（ひれ）がついています。身の部分は縦横線によって分割されていて、この区画された形がお坊さんの袈裟（けさ）に似ているので、袈裟襷文（けさだすきもん）といいます。

右の銅鐸は四区袈裟襷文銅鐸、左の式部谷銅鐸は六区袈裟襷文銅鐸で



す。（銅鐸はこの他にも流水文銅鐸、横帯文銅鐸があります）
私たちが今、目にする銅鐸は緑青色ですが、作られた当時は金色をしていました。

右の銅鐸を下方から見ると中に棒状の舌（ぜつ）がぶら下がっており、銅鐸をゆり動かすことによって身の内側の突帯（とったい）に当たって音が出ます【聞く銅鐸】。

弥生時代の人々が、農作物の五穀豊穡を願うお祭りの道具として、使っていたとされています。

一方、式部谷銅鐸には舌がありません。

せん。右の銅鐸の高さが39cmなのに、対し、左の式部谷銅鐸の高さは66cm、重さ約10kgもあります。銅鐸が最初作られたころは20cmほどの高さでしたが、最後には1m40cmほどになります。

時代が経過するにつれ、巨大化し、自分の重さに耐えきれなくなつて、鳴らすことができず、舌は意味を持たなくなつたのです。

そのかわり、鈕の周りに対になつた渦巻文様の飾耳（かざりみみ）や周りには突線（とっせん）と呼ばれる凸形の線がつけられ、飾りがきらびやかになり、地域のシンボルとしての役割を持つようになり【見る銅鐸】。

近畿式銅鐸と呼ばれます。この時期の銅鐸として、他に飾耳のない三遠式（三河・遠江地方）銅鐸があります。

◆国宝級銅鐸の大発見！

2018年4月、兵庫県淡路島の南あわじ市で大発見がありました。工場の砂置場で土砂を運搬中のブルドーザーから銅鐸2個が発見されたのです。翌日、南あわじ市は土砂置場の全土砂を調べ、計7個の銅鐸発見となりました。この銅鐸は松帆銅鐸（まつぼろ）と呼ばれています。この発見で、

♪驚くべきことがたくさんありました。

第一に、全国で4番目の多さ、7個もの銅鐸が一度に発見されたことです。

第二に、銅鐸のうち1個は全国でも10例ほどしかない最古段階の銅鐸だったこと、他の6個も次に古い段階の銅鐸だったことです。現在、銅鐸の製作段階は4段階に分けられています。そのうちの最古と2番目に古い段階の銅鐸の発見でした。

第三に、銅鐸の中から舌が発見されたことです。銅鐸と舌と一緒に発見されるのは極めて珍しく、それまで全国でも一・二しか例がありませんでした。銅鐸7個のうち、6個の中に舌が入っており、銅鐸と同じ数の7個見つかりました。

第四に、大きい銅鐸の中に小さい銅鐸を入れた銅鐸（入れ子という）が3組もありました。入れ子の銅鐸は全国で見つかりますが、なぜ入れ子にするのかはよくわかっていません。

第五に銅鐸の鈕（吊り手）や7個の舌のうち4本の舌に、吊り下げる紐（組みひも・よりひも）やその痕跡が残っていました。銅イオンのおかげで、腐らずに残っていたと考え

られています。全国で初めての発見でした。

第六に、この紐に付着していた植物遺体を放射性炭素年代測定という方法で測定した結果、銅鐸が埋納された年代が紀元前4世紀から紀元前2世紀だとわかったことです。

第七に、青銅の分析（発光分光分析、鉛同位体比分析）により、その銅・鉛の成分がわかり、松帆銅鐸は朝鮮半島産の鉛が使用されていることがわかりました。

第八に、松帆銅鐸の中に、島根県の加茂岩倉遺跡や荒神谷遺跡から出土した銅鐸と同じ鋳型から製造された銅鐸があることが判明しました。そのことで、弥生時代、淡路島と出雲との交流があったことがわかりました。（この項、南あわじ市HP「松帆銅鐸」等参照）



→松帆銅鐸
『兵庫県立考古博物館図録』

見る銅鐸

シンボル

新段階



1世紀

2世紀後半

式部谷銅鐸の頃

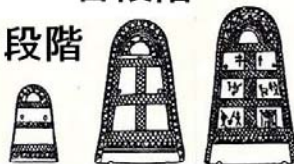
聞く銅鐸

農耕祭祀

中段階

古段階

最古段階



紀元前4世紀
～紀元前1世紀

松帆銅鐸の頃

◆銅鐸の変遷
古式の銅鐸は紀元前4世紀頃、20cm程のものが作られ、農耕祭祀に「聞く銅鐸」として使用され、やがて埋納されました。

その後、銅鐸は形がだんだん大きくなっていきます。鈕も丸みを帯びた菱形（最古段階）から、上側が長くなり（古段階）、続いて下側も長く、

扁平鈕になり（中段階）、紀元50年を過ぎる頃には鈕の周りに突線のついた大型の銅鐸（新段階）へと変化し、使われる材料（青銅）も中国製になります。

式部谷銅鐸はこの最後段階の銅鐸（新段階の突線鈕式袈裟櫛文銅鐸）です。最後段階はさらに5つに分かれ、式部谷銅鐸は3番目です。新段階の5番目を最後に銅鐸は突然、姿を消してしまいます。この銅鐸は完全な形で出土する場合がありますが、粉々に破壊された状態で出土することもあります。このとき社会的に大きな変化があったと考えられます。2世紀後半頃、卑弥呼の時代のことです。

（つづく）

カワタしぜんたい

No.2 山村 元秀

田んぼから見える日本の水環境



田んぼは日本最大の水湿地で、現在は1年のうちの半分が乾燥状態です。たくさんの生き物のゆりかごになっていますが、急激に生き物の絶滅が進行しています。今回は田んぼの生き物の変化について紹介します。

6月の中旬になると市内の田んぼも田植えが終わります。この時期は田んぼにはミジンコがいっぱい発生し、オタマジャクシやヤゴ、アメンボなどが育ちます。ハウネンエビが大量に発生している田んぼもあり、何気なく見過ごしている田んぼの中を、少し気をつけてのぞいてみるといろんな命が見られます。

トノサマガエルはどこへいったの？

トノサマガエルは泳ぐ時に抵抗が少なくなるよう頭が流線型になっていて、後ろ足にはヒレがついているので泳ぐのに適しています。卵の数は2,000個ほどです。卵はメスの体から出て受精するとゼリー層が水を吸ってふくらみソフトボールぐらいになります。



ヌマガエル

す。そのトノサマガエルを身近な田んぼでは見なくなっていました。

田んぼと密接に関わりがあるこのカエルは、指先に吸盤がないのでコンクリートの水路を上れないなどの環境の変化で、減少しているようです。



トノサマガエル

身近な田んぼで見られるカエルは、ほとんどがヌマガエルです。このカエルは暑さに強く、30度を超える田んぼの中でも元気に育ちます。ツチガエルとよく似ていますがヌマガエルは腹部が白く、ツチガエルはやや暗い色調をしています。

カブトエビ・ハウネンエビ？

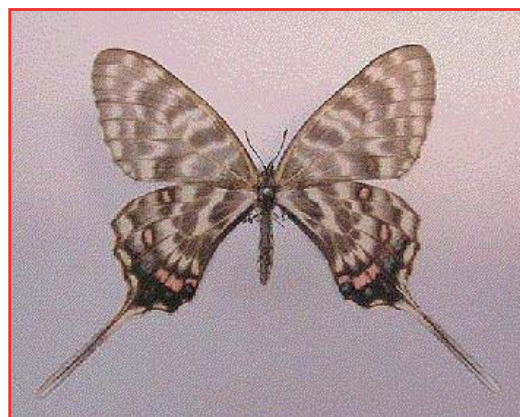


細長い体をして、いつも背中を下にして泳いでいるハウネンエビは、その美しさから「田金魚」とも呼ばれます。緑の体に赤い尻尾で優雅にゆっくり泳ぐ姿が、「田んぼ」を泳ぐ「金魚」に見えたことからこの呼び名が付いたのでしょうか。初夏の頃に突然現れ、産卵を済ませると1ヵ月程度でいなくなってしまう。エサはおもに植物プランクトンなどをこしとって食べます。ハウネンエビは耐久卵といって、寒さや乾燥によく耐え、水のない環境で何年も休眠状態で生き続けます。そして、適当な温度と水が与えられると一気に孵化し、短期間に成長して次の卵を産んで死んでいきます。

乾田化が進む田んぼではカブトエビやハウネンエビ等が見られても、ゲンゴロウ、タガメ、タイコウチ、ミズカマキリ、コオイムシなどの水生昆虫はほとんど見ることはできなくなりました。日本の水環境が砂漠化しているのではと心配する声もあります。



ジャコウアゲハとホソオチョウ



木津川の堤防は以前から、ウマノスズクサを食草にするジャコウアゲハがたくさん生息することで知られています。独特の形をしている蛹は「オキクムシ」とも呼ばれ、よく知られているアゲハチョウです。

ホソオチョウは、日本に棲む蝶ではありませんでした。朝鮮半島から中国にいて、人によって日本に連れてこられ、京都府南部でも発生するようになりました。野外に放されたこの蝶は、弱々しく飛ぶ外見にかかわらず増え続け、現在は御幸橋左岸でも発生しています。

ホソオチョウの生む卵の数はジャコウアゲハにくらべて多く、幼虫の食草は同じウマノスズクサのため競合し、ジャコウアゲハの生息域が狭められることが危惧されていましたが、ホソオチョウの侵入によって個体数が減少しているとはいえないようです。

子ども達と堤防の生き物探検をしていたら、どちらのチョウも見ることができます。また、冬には橋桁などについてジャコウアゲハの蛹の姿もよく見かけます。どちらのチョウも生息域を共有し、しっかり繁殖しているようです。

田んぼを利用してヒナをかえす鳥



土色で目立たないけど、とてもかわいいヒナ



親鳥も田んぼでは目立ちません



わらなどで作った簡単な巣に産卵します

田植え前の田んぼで、突然「キリリッ、キリリッ」とかん高い大きい鳴き声がして、驚いたことはないでしょうか。鳴き声の主を観察したことがある人も多いはずですが。この鳥は田んぼに下りているときは目立ちませんが、飛んだ時の姿はカモメではないかと思うほど、先端が黒くなった白い翼が目立ちます。

鳥の名前はケリといい、チドリの仲間です。その繁殖行動は、田んぼの活動サイクルに合わせて、実に巧妙に行われています。田おこしの終わった水田や休耕田の土の上に簡素な巣を作り、田おこしが始まるころにはヒナをかえします。ヒナは生れてすぐ自力で歩き、自分で餌を採りながら生活します。他の鳥のように、親鳥がヒナに餌を与えることはないそうです。

しかし、親鳥は餌を与えない代わりに、外敵からヒナを守ることに全力を尽くします。ヒナのいる場所に近づくものには執拗に攻撃をかけます。田植え前の田んぼを通るときに経験する激しい鳴き声や、頭上近くまで飛んでくるケリの姿というのは、親鳥がヒナを守るための防衛行動です。ヒナを襲うカラスやトビなどが近づこうものなら、緊急発進して彼らを追い払ってしまいます。このようにして親鳥に守られたヒナは、田植えが終わるころ、親の保護から離れて巣立っていきます。

ハ幡巡礼 イエスに会いに行く②

林政廣

◆東高野街道のイエス

「八幡ぶどうの木教会」は私のパワースポットになり、原発・環境・基地・天皇制など今を生きるヒントを得たが、改築工事で神原に仮移転。そこでまた新たなパワースポットに出会った。

東高野街道。駅前で目を見張る。私の住む賀茂（上賀茂と西賀茂の総称）に酷似。かかりの走井餅は、上賀茂神社の「やきもち」、安居橋は加茂の社家町にかかる石橋の風情。

男山を右手に石畳を行くと、平屋に煙突が立ち、素朴な甘味の並ぶ「みささ堂」さんに出る。餡を炊く割烹着に母の姿が過ぎる。岐阜の農家、12人の子だくさんの6番目。口べらして小学5年も終えずに京の和菓子店に奉公に来た。一斗缶を洗い、八ッ橋を曲げ、店の赤子を負い子守り。泣き部屋（物置き）で泣く。忘れ難い2才下の弟、利見。早朝から教科書を音読する勉強家。「今朝は鶏が鳴くのか利見の本読みか、どっちが早かるうか」と村人の朝の挨拶。代用

教員になったのに赤紙が来て、「遠路応召の報告に来てくれたさかい、貯めてたお給金を天神さんの角で持たせた。けど、レイテ島オルモックで戦死」が母の口癖。その母が昔とつた杵柄、早春に草を摘みつけてくれたよもぎ餅が「みささ堂」さんにある。松花堂昭乗さんの句が各町内に掛かる。「本も文章も声に出して読みやす」。無学な親と卑下しつつ弟利見の勉強法を母は強いた。街道を通ると私はつい昭乗さんの句を唱える。

私の賀茂に似て、八幡さんの靈光で建てられた寺や祠がある。その懐の深さ。本妙寺さんの妙見祭では、「どなたでもどうぞ」の貼り紙に誘われ、祭後の落語会など毎年邪魔する。

まちかど雛祭りには、毛糸や折り紙で作った人形も。質素なのにパワフルなこの街道はイエスが説教しつつ歩いたガリラヤの匂い。

志水公民館は観光用にトイレを開放し、心づくしのお月見会をして下さる正法寺さんを通り抜ければ、細道で猫たちが迎えてくれる。道端に真っ赤な前垂れの地藏さんが二十数基。どうやって集めたの？と聞くと、年老いたので・・・と笑う主人。京の夏の地藏盆、前垂れを新調し、静と奉納していた母が現れた。

この街道は母の人生の意味を考えさせる。

11歳での故郷喪失。女中奉公先の世話で結婚。頼みの弟の戦死。時代だからと人は言う。しかし、嫁してキリスト教に出会った母はイエスの確かな声を聞いた。

「信仰があればあなたたちにできないことは何もない。『ここからあそこに移れ』と言えば山はうごくだろう」母は楽天家で自信家だった。摂理への確信は時代への怒り、そして怨みへと高まった。

10歳上の、戦争で心を病んだ夫を支え、今で言うパートで働き続けた。高校3年の進路相談。「無学な親でして・・・」と卑下したあと、突如「先生、この子、学校の先生になれますやろか」と言って驚かせた。父は当時59歳すでに停年退職。だが、2歳下に弟も教職に就けば返還不要の奨学金を受け、戦死した代用教員の叔父と母のリベンジ。私は教員になった。

93歳で初めて利用したショートステイ。入所日は夕食のみ。退所日は朝食のみなのに、1日3食分徴集された。母の怒りは頂点に。「どこの店が、食べてへんのに金取る?！」

平成17年厚労省通知。「食費は1食ごとに分けて設定することが望まし

い。」

「望ましい」だけで強制ではない。54%の事業者が3食一括徴集。利用者は多額の過払い。母の明快な声は若い記者に届いた。丁度、郷里で兄弟姉妹が全員亡くなり、戦没者弔慰金の残り僅かが京の母にまわってきた。

「死んだ利見がくれたこの金で国へ行きな」。

勿論、門前払いだったが、国もさる者、食費に限度額のある高齢者の過払い分は国が負担していたので、つまりは公金の不正使用。かつ消費者契約法第10条違反。あつさり是正した。

京都市では1食単位を掲げる条例もできた。

弟の出征から72年。「条例を作ったお婆ちゃん」はシンポジウムに呼ばれ、やっと国家の横暴と折り合いをつけた。怒りや怨みという下品だが、あの戦争の責任者も反省もうやむやなこの国での唯一の生き方だった。

静かで素朴な中に文化のパワーを持つ東高野街道。母の遺影を携えていつも歩いている。

宗教と社会

9

浄泉寺住職 大原 光夫

◆世間とは何か

前回は、「世間」という言葉の常識に対して、坊さんの理解は随分違っている、という話をしました。聖徳太子だけでなく、浄土真宗の開祖、親鸞という鎌倉時代の僧侶は、「よろずのこと、みなもってそらごとのたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と言っています。直訳しますと「よろず（世間）のことは、ことごとく不確かで空しく、真実と言えるものは何一つない。ただ念仏（仏教の教え）だけが真実でございます」という意味です。

2例あげましたが、いずれも「世間」に対して、「不確かなもの」という立場です。「世間並みにしておけば間違いない」という現代の常識から考えれば、なんとも理解できない坊さんの考えです。

そこで、「世間」という言葉のルーツをたどってみたいと思います。

日本のお経を眺めていますと、その文言で「世間」という言葉はたく

さん出てきます。そもそも経典は、中国で完成したものがそのまま日本に流入しました。日本の仏教は、これらの経典で成り立っています。中国で完成した漢字による経典は、インドのお釈迦様の説法を翻訳したものです。孫悟空で有名な三蔵法師（玄奘三蔵）がインドより持ち帰った経典（主にサンスクリット語）を中国語に翻訳します（約20年かかった）。そこで「世間」と翻訳したインドの言葉とはどんな言葉なのか。それがわかれば「世間」のルーツにたどりつけます。その言葉とは、「LOKA」（ロカ・ロウカと発音）です。さて、この「ロウカ」とはどのような意味か。これがわかれば「世間」の本来の意味に近づけるわけです。

「LOKA」を直訳しますと「崩れるもの」です。物事が同じ状態を保つのではなく、絶えず変わり、土台から崩れ去ることを指します。これを「世間」と翻訳しました。どうやら、坊さんの理解の方が原語の意味に近いように思えます。仏教が、「出世間の教え」といわれる所以もここにあります。「世間体を保つ」ということは、日々変化し土台から崩れるものの上に立つて、バランスを崩しながら「最善を尽くしているこれが一番」

と思っている、危うい姿なのですよと警告しています。

「世間」のことで数年前におきた事例は、「都民ファースト」で人気を博した小池百合子さんです。小池さんは『希望の党』を結成しました。まさに、「小池時代だ」と多くの人や政治家が殺到しました。マスコミは「ひょっとしたら、自民党をひっくり返すかもしれない」と報道。しかし、途中で失速。あまりいい結果とは言えませんでした。その後も思わしくない事態が続いて、ついに希望の党は消滅しました。

この、盤石と思われたものが音をたてて崩れてゆく様を「ロウカ」と言います。つまり、「世間」と言っている訳です。ここに身を投じた方々は、悔しい思いや「これでよかったのだろうか」という無念が残るばかりです。

私たちの人生は、このようなことの連続といってもよいかもしれません。「不確かな世間」をつい確かなものと思ひ込む。そして、そこにしがみつくなければならない。このことを仏教では、「苦」と表現します。仏教で扱う「苦」と言いますのは、家計が苦しいとか、息苦しいなど体

感的な苦だけを指していません。もう少し広く「不如意」（意のごとくならない）「あてが外れる。思い通りにならない」こと全般を「苦」としています。人生のおおかたの苦しみや、悔しい思いは、この世間から出る「出世間」の発想が大事です、と仏教は勧めています。ひょっとしたら、少し「世間ばなれ」しているあの小泉元総理の方が楽な生き方かも知れません。「いつぱい私もあんなことやってみたい」「あんなこと、私も一回言うてみたい」と、あこがれに似た思いをお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

「世間さまに逆らうな」「世間並みに」と、それが万全の生き方のようになっている現代人の「常識」と、坊さんの常識のズレが生じているようにも思えます。

次回、10回目のお話でいったん終了の予定です。この間のお話のまとめをしたいと思います。





ちよつと能舞台へ

その2

猪飼 康夫

むかし、石清水八幡宮の頓宮前に仮設舞台が設けられ、大勢の市民が集まりお能を楽しんだことがありました。

身近な場所で開演されると気楽に見に行けますが、慣れない能楽堂へ足を運ぶのは敷居も高く行きそびれます。でも、屋外で公演される新能なら気楽に見に行けると思います。近場なら京都新能（平安神宮）や大阪城の薪能があります。また、好みの演目を選んで能舞台へ出かけるのも一つの方法です。

お能には「熊野・松風、米の飯」という言葉があります。熊野や松風のお能は、米の飯のように飽きないとの言い伝えです。しかし、お能を見慣れない方々は、このような静かなお能には眠気を誘われます。

お能の演目は、一番目ものから五番目ものまで、ほぼ下記のように分類されています。

一番目ものは、神能かみのうとも言われ「高砂」「弓八幡」のように天下泰平、国土安穩を寿ぐ曲です。

二番目ものは、修羅物しゅらものとも言われ「敦盛」「忠度」のように戦の罪で死後は修羅道に落ち、苦しみから逃れようとこの世に助けを求める武将の物語です。

三番目ものは、鬘物かづらものともいわれ、若い女性をシテとした優美な曲で、「羽衣」「杜若」「松風」など、があります。

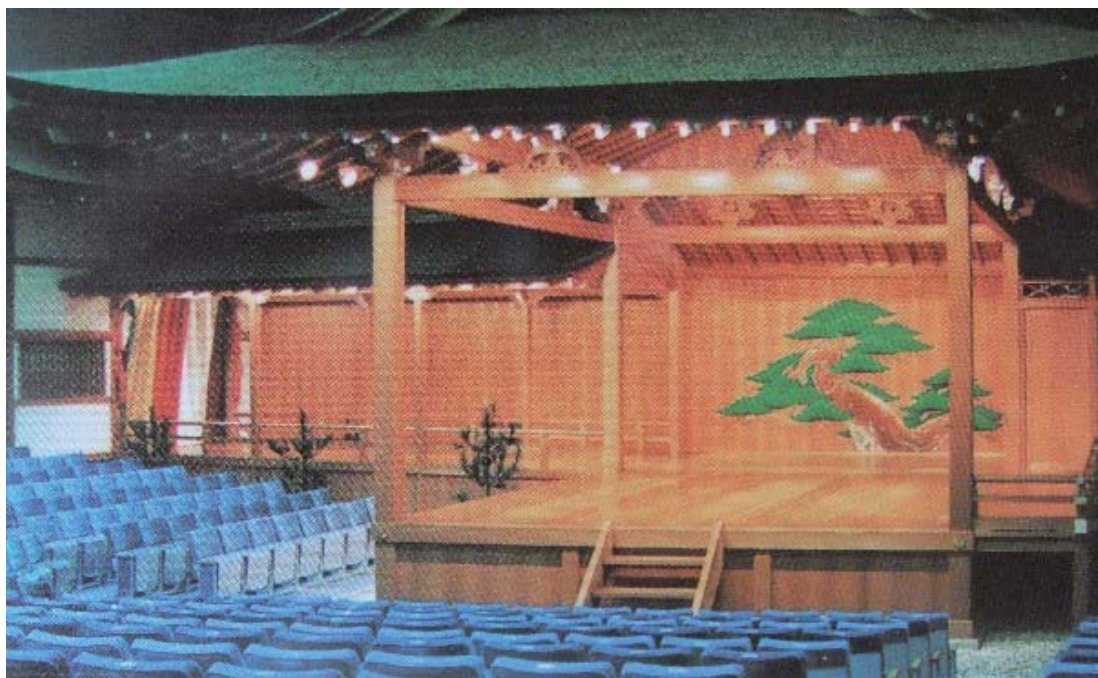
四番目ものは、狂乱もの、その他種々の形態のもので、「隅田川」「道成寺」「安宅」など、があります。

五番目ものは、鬼、怪物を扱った曲「土蜘蛛」「猩々しやうじやう」「石橋」などがあります。

フルコースの公演の場合は、先ず「翁おきな」、続いて一番目ものから順に五番目ものまで演じられ、狂言も入るので、かなり長時間の開演となります。通常の公演では、二、三番の演目を選び、間に狂言が入る場合が多いです。（お能の数は一番、二番・・・と数えます）

初めての方が退屈されない曲は、ストーリーがわかり易く、お役の人数が多く、動きがあり、目立った小道具が使われる曲で、たとえば「土

蜘蛛」「道成寺」「安宅」「石橋」などがあります。なかでも「十番斬」という特別演出付の「夜討曾我ようちそが」は、いろんな型の立ち回りが入り面白く、退屈しません。



↑観世能楽堂（観世流 能のすすめ）で、東京に住いていた時、渋谷まで見に行った思い出があります。建物の老朽化のため閉場され、2017年春に銀座六丁目のビル地下3階に移転されました。総檜造りの能舞台は解体して移築されたとのこと。

八幡俳句歳時記 8

近くにいた俳人たち(3)

奈良市あやめ池

— 橋本多佳子

小笠原 信



前号は、京阪線の香里園に8年間住んでいた西東三鬼さんの2回目でした。今回は、その三鬼さんと同じ山口誓子主宰の「天狼」創刊同人の橋本多佳子（以下多佳子さんと表記）を取り上げます。

多佳子さんは、明治32年東京の生まれ。彼女が38歳の時（昭和12年）、成功した実業家の夫とは死別しています。高浜虚子門下の女流俳人の草分けの四丁（星野立子・中村汀女・多佳子・三橋鷹女）の一人で、昭和21

年頃から大活躍しました。

多佳子さん（残念ながらお会いしたことはありませんが）は、男山の南南東20kmほどの近鉄奈良線のあやめ池遊園地に近い所に、47歳から没年の64歳まで住んでいました。敗戦後の俳句会を妖艶かつ端麗な俳句で牽引しました。彼女の句は『橋本多佳子全句集』（角川ソフィア文庫）で手軽に読めますよ。

乳母車 夏の怒濤に よこむきに

多佳子さんの代表句の一つです。防波堤の上でしょうか。高い大きな波が押し寄せています。かなり怖い句です。乳母車に乗せられているのは、四女の美代子さん（後に、母の「七曜」主宰）でしょうか？下五の「よこむきに」が多義的で意味深ですね。

螢籠 昏ければ揺り 炎えたゝす

この句が一番有名な句でしょうか。単純な景・場面としては、螢籠の中の螢の勢いが弱くなったので、揺り動かして光らせようという句。しかし、下五の「炎えたゝす」は情動的で強い表現。暗くなっているのは螢だけではない、むしろ自分自身の気持ち揺すって励まし、奮い立たせ

ようとしているように読めますね。多佳子さんは、何に向かつて、誰に向かつて炎えたとうとしているのでしょうか？

さて、前号で三鬼さんの「中年や遠くみのれる 夜の桃」の名句を紹介しました。多佳子さんは丁度この時期から数年間、『奈良俳句会』という俳句鍛錬の会を毎月開いています。その状況は「冬は三方から炬燵に足を入れて句作りをする、疲れゝぼそのまま睡り、覚めて又作ると云ふ有様であり、夏は三鬼氏も静塔氏も半裸である。：厳しい二人を向うにして悪戦苦闘をすることによって自分を創り直そう」と表現されています。『奈良俳句会』の成果は、昭和26年刊の句集『紅糸』に結実。句集の冒頭に置かれた句が、〈雪はげし 抱かれて息の つまりしこと〉〈雪はげし 夫の手のほか 知らず死す〉です。確かに、表現も内容も激しい句ですね。文法的に言えば、時制は過去形。さらに、夫は、12年前に亡くなっている。普通に、素直に、ぼーっと読めば、この並置された句によって、夫追慕の寡婦貞女の句と読めますね。しかし、日吉館での俳句会の状況から貞女では太刀打ちできない。「抱かれて」の横に「夫の手」を配置する

— 対象は誰もが亡夫と思つて仕舞う。巧妙なカムフラージュ・演出だと今回気づきました。

では、仮面貞女は誰に「抱かれ」たのでしょうか？

三鬼さんでしょう！ 仮想恋愛にしても恋愛ごっこだとしても、対象はダンディで人たらしのようでも、基本的には小盆地、津山出身の誠実な男、三鬼さんです！ 一方、この句から彼女のナルシズムを読み取ることも出来ますね。『全句集』の写真（上）を見ても相当な美人ですし。

これまで、ぼくは誓子の解説などに影響されて、多佳子俳句をへ寂しい寡婦の観点で読んでいました。しかし、どこか腑に落ちないものを感じていました。『紅糸』の中の次の句を、さてどう読み解き鑑賞するか？

夫恋へば 吾に死ねよと 青葉木寛

季語はフクロウの仲間の「青葉木寛」で、夏。（次号に続く）



コロナ禍を考える

今なお全世界を覆うコロナ禍ですが、科学的な見地から、そして地域の実態から見えてくることを考えてみたいと思います。

新型コロナウイルス感染症から学ぶ

京都女子大学名誉教授

高桑進

ここでは新型コロナウイルスを含む病原性を持つウイルスや病原性細菌の存在意義「なぜこんなものが存在するのか」を理解することで、これからは人間中心の考え方からヒトもこの宇宙船地球号に乗船している生き物の一員であるという自覚を持つてほしいと考えて、お話をさせていただきます。

2019年の12月から新型コロナウイルス感染症が中国武漢で発生し、そこから2020年に入り、あつという間に全世界に広がりました。5月現在でコロナウイルスの感染者数は全世界で数百万人となり、死亡者も数十万人になりました。特に欧米諸国が大きな被害を受けています。

ところが、不思議なことに感染源となった中国は別として、台湾、韓国、日本などでは人口10万人当たりの感染者数や死者数が極めて少ない事実があります。その理由として、仮説としてはBCGの接種率が高いことが関係しているのではとされていますが、これは相関係数であり因果関係ではありません。さらに日本で感染者数や死者が少ない要因としては、WHOで新型コロナウイルス防止活動の中心として活躍している進藤奈邦子医師は、NHKテレビで日本人には感染症の専門家が多いことや日本人の高い衛生観があり、他ではなかなか真似できない日本人の底力ではないかと、高く評価していました。彼女は世界保健機構（WHO）本部のグローバルインフルエンザプログラム・メディカルオフィサーで、2014年に西アフリカで流行した感染後の治療開始が遅れると致死率が80〜90%にも上るエボラ出血熱対策にチームリーダーとして活躍した方です。

ところで、なぜアジアでコロナウイルスの感染率が低いのかの科学的な理由としては、コロナウイルスの遺伝子配列がアジアで広がったものと欧米で流行しているものとは違うこともありそうです。また、死者の大部分は糖尿病などの病気を元々持っていた高齢者であり、急性の肺炎悪化に耐えられなくて亡くなることが知られています。若い人や子供では感染しても死亡することは少ない理由は、今後研究が進めばその理由も明らかになると思われます。

このコロナは中国や東南アジアで発見されたSARSやWERSを引き起こすコロナウイルスとも非常に似ていて、これらのウイルスはコウモリなどの野生動物から人間へと感染したとみられます。エイズウイルスがアフリカミドリザルから人に感染したように、多くのウイルスが動物から人間へと感染します。

エイズの原因であるヒト免疫不全ウイルス（HIV）はもともとアフリカに住むアフリカミドリザルなどの霊長類に広く感染していましたが、感染サルには何も病気を引き起こさず共存していました。ところが、一部の地域では人にも感染して「痩せ病」を引き起こして死に至らしめていました。つまり、人間に感染したことでの死亡率の高い病原性ウイルスとなったわけです。それが今までは少数の集団で暮らしていた人々が外から来た人々と性交渉する機会が増えて感染し、あつという間に世界中に感染拡大しました。

ところで、皆さんは細菌とウイルスの違いをご存知ですか？ 細菌の大きさは1〜5μm（マイクロメートル。1μmは1mmの千分の1、つまり1mの百万分の一です！）で、ウイルスは0.01〜0.1μmです。細菌がゾウならウイルスはネズミになります。その構造は、細菌は単細胞で、ウイルスはDNA（デオキシリボ核酸）やRNA（リボ核酸）と呼ばれる裸の遺伝子です。細菌は自ら分裂して増えますが、ウイルスは自分だけでは増殖できなくて細胞に寄生、取り込まれて初めて増殖できるので生物と無生物の中間とみなされています。細菌には抗生物質が有効ですが、ウイルスには抗ウイルス薬が有効です。どちらも有害なものばかりが有名ですが、ヨーグルト、納豆、味噌、醤油などの発酵食品は全て細菌の働きです。また、ウイルスはその増殖力を使いiPS細胞の研究に貢献したり、新薬の開発にも利用されたりしています。

ウイルスの起源は、細菌内の遺伝子であったDNAやRNAが飛び出したものがウイルスとなり、さまへ

さまざまな動物に移り住んだと言われている。この地球が誕生してから最初にできたのがRNAで、その後で細胞が誕生したと考えられています。RNAウイルスの方が人間よりも先に誕生したわけです。

さまざまな生き物に移り住んだウイルスは寄生した生物の遺伝子を突然変異させて、宿主にはなかった新しい機能を発現させたと考えられています。その意味では、ウイルスのおかげで生物は進化してきたといえるかもしれません。(つづく)



コロナ禍が福祉の問題を浮き彫りにする

八幡市で暮らす市民の生命と暮らしをサポートするため、懸命に働いている人たちがいます。今般のコロナ禍では医療従事者の過酷な現場がメディアで取り上げられましたが、福祉関係の現場報道は僅かでした。どんな状況だったのか、「きずな」編集者が施設の現場をのぞいてみました。

◆使命感と感染に対する不安の狭間で

新型コロナウイルスの感染拡大が危惧されても、「暮らしの場」は縮小も休業もできません。

それがわかっていても、職員さんたちは「自分を守る」と「家族を守る」と「利用者とその家族を守る」との間で気持ちが揺れます。どれも等しく大切であるとわかっているからこそ、です。人は自分自身が守られていないときには、他者への思いや許容範囲が狭まってしまいます。

「本当は休業したい」、それが職員さんたちの本音だったと思います。でも、利用者の家庭でパニックや健康障害が起こるかもしれない、高齢の利用者が家に長く居ることで「コロナ以外」で死や事故、病気が発生するかもしれない。やはり利用者の生活を守らなければならない。そんな葛藤に苦しめられる職員さんが多くいました。

国は「学校が休業でも、放課後等デイサービスでは可能な限り長時間の受け入れをしてください」「事業所も放課後等デイサービスも規模縮小や休業も検討してください」「家庭の事情がある場合は受け入れをしてください」と、当たり前のことを通達

していました。でも、そのために必要なサポートも相談も皆無だったようです。職員さんの話を聞いていて、なんとなく責任逃れのための通達だと感じてしまいます。それ以前に必要なマスクも消毒液も足らず、防護服などないのが現状でしたから。

また、「自粛」の意味がわからない人、自分で身を守る行動をとることが難しい人、行動範囲の広い人などが福祉の現場なんだと、改めて思い知らされました。つまりコロナの恐怖を理解できない人もいる中で、その人たちを守る難しさがあるのです。

◆もしも陽性患者が出たら

「入院はできません。隔離場所はありません。施設で対応してください」と行政に言われましたと、ある福祉関係者に聞きました。いったいどんな対応ができるというのか、私自身も思います。もし、施設内のどこかでコロナの感染が発生したら、ほぼ全事業を休業しなければならなくなります。でも利用者にはここにしか居場所はありません。そう考えると、医療と生活支援をセットにした政策が必須ではないでしょうか。医療行為だけでは生活できない利用者が、

安心して入院するには普段の日常の支援が不可欠になってきます。

もうひとつ大きな問題は、日割り報酬です。休業すれば職員に報酬は入ってきません。コロナ対策で電話での相談も報酬の対象となるとのことですが、自治体の裁量により認められる地域とそうでない地域があり、地域格差が大きく、国が周知徹底して月ごとの基本報酬にするべきだと考えます。利用者の幸福は、サービスする側の生活が守られてこそ実現するからです。

福祉とは、国家の根幹です。自治体によって福祉の深度が違うのは、等しく税金を払っている国民にとつて大きな矛盾ではありません。

インターネット上で、ある投稿者がこんな言葉を綴っていました。

——これらは全て政治だ。政治とは生活そのものだからだ。生活上の全ての行為は、政治がつくる制度の上になり立っている。——



読者の文芸

俳句

一郎

はしり梅雨田畑起して水ぬるむ
 やつと着た新入生の初姿
 地にポトリ雨後に鮮やかおち椿
 コロナ菌体温計が必需品

重悟

青かえで梢に遊ぶ日の光
 菖蒲揺れ池の主とて鯉のそり
 日常という名の僥倖梅雨に入る
 西瓜割る母を囲んで子等四人
 ひたむきに替女も伝へて虎が雨

やすお

もう行けぬ枝先で飛ぶ天道虫
 歳時記に母の署名や梅雨の入り
 農後継ぎなき老夫婦汗ながし
 御神能の舞台をつばめ通り抜け
 夕ずつや砂場に残る水鉄炮

桂

相生のよき樹にからむ忍冬
 あじさいの白や遺影のは、に触れ
 梅雨の蝶ものうげに又なげやりに

二人居て蚊にも好みの血の臭い
 地に落ちて燃え尽きぬ性海紅豆

信

一生に山靴一つ雲の嶺
 まだもののかたちに昼寝大方丈
 一针も後方支援敗戦忌
 噴水の頂点あたり反古反古と
 胃ろうもつしなくていいよ加子の花

※【胃ろう】胃に管を通して食事をする
 撮ること

ヒロ子

夏祭柳の下で大はしやぎ
 氷融け白熊あついあついよう
 川端のホタル群がり道案内
 夕涼みドラマ観て友と推理する

栄

コロナ禍を癒やす心や柿若葉
 緑蔭や手押し車の二つ三つ

淑子

緑蔭に憩ふ白杖犬も又
 興亡の寺の礎石や夏蔵

千

公園のラジオ体操緑雨かな
 聞き慣れぬ鳥の音あまた夏の朝

短歌

一郎

桜散りさつき満花に藤も咲く
 遊歩道には散策の波

もう間近水田の水輝きて

早苗がなびく初夏のそよ風

ヒロ子

大輪の花咲かずとも時来れば
 小さき花咲くそつと花咲く

読者の皆様へ

俳句と短歌が多数寄せられました。
 ありがとうございます。

「きずな」13号は10月中旬に発行
 されます。秋の句や短歌をふるっ
 てご応募ください。

※切…9月5日

宛先…〒614-8332

八幡市橋本新石22-11

FAX 075・983

・5278

土井三郎

編集後記

今年の3月初旬より、新型コロナウイルスの感染を防止するための自粛要請が始まり、様々な施設が閉鎖されました。経済活動はもとより、文化的な活動も停止させられたのです。そのことの影響は深刻なものがああります。

「きずな」12号を編集するにあたり、この災難にいかに向き合うのかを特集することにしました。

新型コロナウイルスとはいかなるものなのか。高桑進氏の所説から学びたいと思います。また、八幡の福祉や医療の現場がどうなっているのか。紙数の関係から圧縮されたものになりましたが、現場のリアルな状況が伝わるレポートが得られました。

第二波・第三波が起こることも予想され、コロナ禍については、これから正しい情報を得るとともに、現場の実態を紹介し、市民として何ができるのかをともに考えてゆきたいと思っています。読者の皆さんからの自由闊達なご意見をお待ちしています。

—「きずな」編集委員会—

協賛金のご協力をお願いします

(郵) 00940-8-196292

NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会

(銀) 京都銀行男山支店

普通預金

4165224

NPO法人22世紀八幡ルネッサンス協会